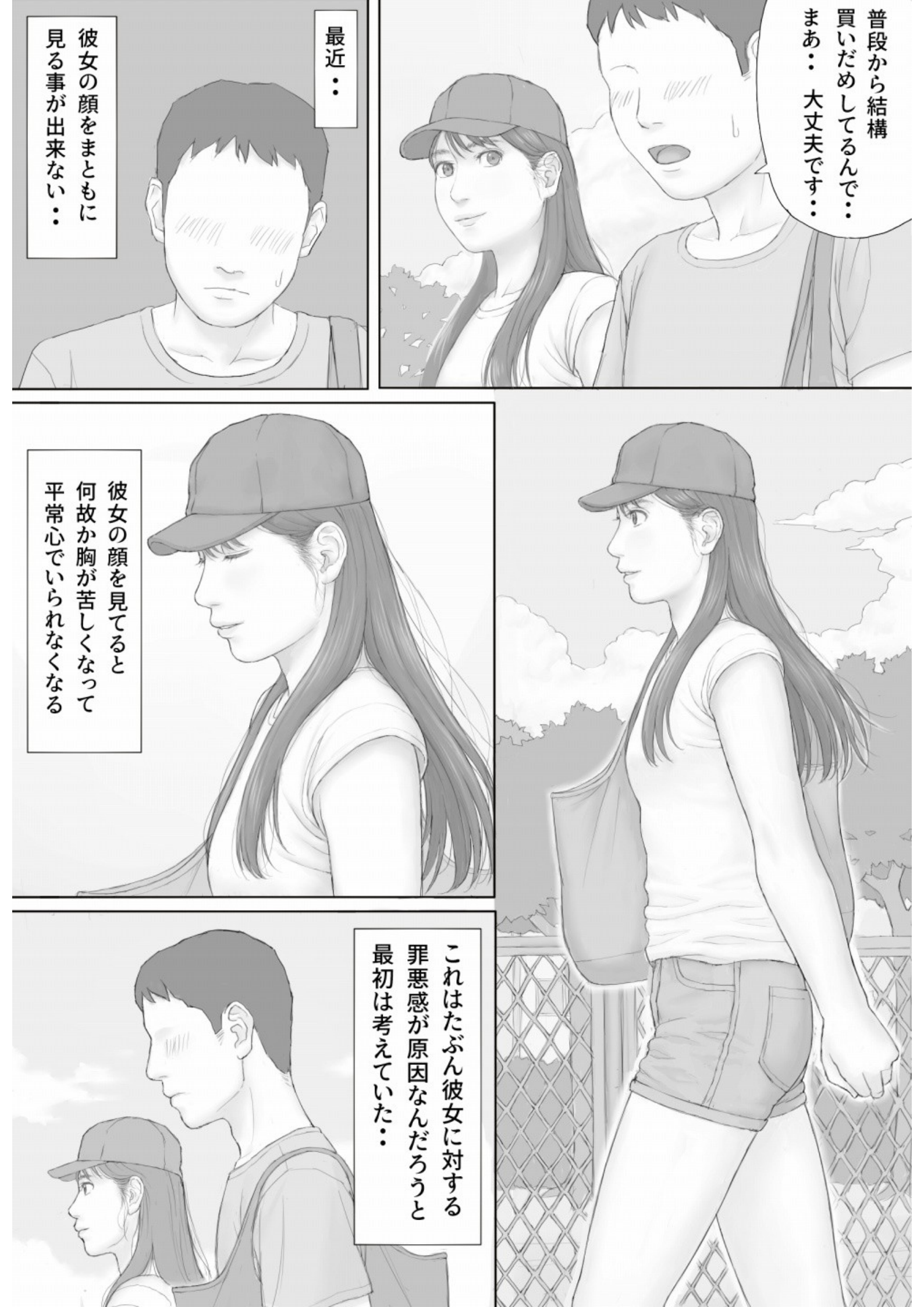
ボッ
ボッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ハッ ハッ ハッ

やっぱりもっと買っても良かったんじゃないの？
せっかく二人で来たのに・・


普段から結構
買いだめしてるんで・・
まあ・・ 大丈夫です・・
最近・・
彼女の顔をまともに
見る事が出来ない・・
彼女の顔を見てると
何故か胸が苦しくなって
平常心でいられなくなる
これはたぶん彼女に対する
罪悪感が原因なんだろうと
最初は考えていた・・

でも・・
そうじゃなかった・・

ドンドンドン

ドーン

あー
今日だっけ

あれっ

この感じは今までの
罪悪感とか性的な興奮とは
明らかに違う・・もっと・・

コウちゃん

今日
花火大会だ

ドーンドーン

もっと心の奥からくる
純粋で・・強い気持ち
一人の人間に強く
惹かれる感覚・・

ここすごいでしょ
ドン ドン
パラパラ
真正面に見えるんだよ
だが・・今更こんな感情を持っても意味は無い
俺は自分の欲望のまま彼女の体に手を出してしまった
もうどんな言葉を使ってこの思いを表現しても何の説得力も無い
俺にはもう・・彼女にこの気持ちを伝える資格が無い・・

りな姉ちゃんは・・

どうなんだろう・・

俺の事どう思ってんだろう・・

うわ大っき・・

ドン

恋愛感情とかは・・絶対無いよな・・だとしたら・・・

おー

彼女の中で俺はどういう存在なんだろう・・

ドン

ドン

彼女にとって俺の存在は・・

びっ・・くりしたー

夏はすぐに終わり・・

あっという間に
時間が過ぎていった・・

二ケ月以上の間
特に大きな事は起きず
普通の日々が続いている

新鮮な事が何も無いと
時間が経つのが早い

半年以上もこの生活を
続けてればさすがに
大抵の事は経験済みになる

前みたいにいちいち
焦ったり動揺したり
する事も少なくなった
俺も少しだけ大人に
なれたのかもしれない

人は慣れて余裕が生まれた時が一番危ない・・
しかし・・
あっ
ちょっと待って・・
コウちゃん
電池買ったか憶えてる？
電池・・
えーと・・買った・・かな・・
あー何で記憶に無いんだろ・・
夕食の事ばっかり考えてたから・・

えーと・・
そうだ
レシート見れば・・
たしか・・お釣りと一緒に・・
あーあった
あっ
あーもう
ドジだから・・
チャリーン チリーン

ドッ ドッ ドッ ドッ
ありがと
完全に油断していた
何でもない日常の中に
突然来る衝撃・・
久々に味わうこの感じ・・
何で俺はこんなに
異常に動揺してんだ
スカートの中が
ちょっと見えただけ
たったそれだけの事だろ
全然大した事じゃない
何か・・・別の事を
考えて忘れるんだ

ガサッ
はー
やっと
帰って来た

結局あの光景を
頭から消す事は
出来なかった・・

今スカートを脱いでる・・
ドッ ドッ ドッ
少し振り返るだけで
見える・・ 彼女の・・

・・いや
何考えてんだ俺は

帰って来てすぐ着替えるのは
いつもの事だろ・・
今まで何度も経験してる・・

いつものように
早く部屋に入れば
いいだけ・・部屋に・・

ドッ ドッ ドッ

早く・・

ドッ ドッ ドッ

早く・・

部屋に・・入・・

ドッ
ドッ
ドッ
ドッ
えっ

スカートの中に・・
こんなお尻が・・

ハァ
ハァ

ああぁ・・すごい・・
この感触・・
パンストの肌ざわり・・

スリ
スリ

ハァ
ハァ

あーいい匂い・・
独特の匂い・・

ムニ
ムニ

柔らかい・・お尻・・
すごい・・気持ちいい・・

もー

あっ

グニ

やだぁ
あぁ・・柔らかい・・
グニ グニ
いい匂い・・
ハァ
ハァ

ムニ
ムニ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
グニ
グニ
んっ
ハァ
ハァ
ビクッ
ビクッ
グニ
グニ
ああ・・・熱い・・・
蒸れてる・・・

スリ スリ
グニ グニ
ビク
ビク
ゴシ
ゴシ
コス
コス
ハッ
ハッ
ズリ
ズリ
ビクッ
ビクッ
ズリ
ズリ
んっ
んっ

ガク
ガク
ズリ
ズリ
あ・ぁ・・
これ・・感じてるのか・・
すごい・・
お尻を動かして・・

ビクッ
ビクッ
ハッ
ハッ
ズリ
ズリ
もっと・・ 感じさせたい・・
もっと激しく・・もっと・・

んっ
んっ
んーっ

ビック
ビック
！

ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ビク
ビク
ガク
ガク
ハァ
ハァ
あっ・・
あぁぁぁ・・
ハァ
ハァ
ハァ
ズリ
ハァ
ハァ
お尻が・・
すごい・・
ハァ
ハァ
ビクッ
ビクッ

ハァ
ハァ
カチャ
カチャ
いいのか・・
また・・
また俺は・・
こんな事を・・
でも・・ 無理だ・・
ここで止めるのは・・
ズッ
ハァ
ハァ
ああ・・暖かい・・
りな姉ちゃんの中・・
ズッ
ズッ
ふぁ
あっ

んっ
うん
んっ
ズンズンズン
んっ
んっ
気持ち良すぎる・・
もう・・止まらない・・
もっと・・もっと・・
ハッ
ハッ
ハッ
パンパンパン
あっ
あっ
あん

白くて・・柔らかい・・
りな姉ちゃんのお尻・・

パン パン パン

うっ
んっ
んっ

ああっ
もうっ
あっ

ぐっ
んっ
んー

ズン ズン ズン

あっ
あっ
あん

ビクッ
ビクン
あはっ
はっ

あっ・・ あっ・・
すごい・・お尻が・・
跳ねてる・・
ハァ
ハァ

ビック ビック
あっ
あっ

ハァ
ハァ

ガク
ガク
ハッ
ハッ

ガク
ガク
ヌポ

ガク
トッ
トッ
ガク
ビュッ
ビュッ
ああ・・・・・
気持ち・・ いい・・

ビュッ
ビュッ

また同じ事を・・

なんてバカな思い込みをしてたんだ俺は・・

自分は少し大人になれたなんて・・

実際はここに来た頃から何も成長してなかった・・

相変わらず欲望に支配されて自分を全く制御できない・・

いや・・・

本当は終始ずっと理性を失ってたわけじゃなかった・・

あの時・冷静になって止まりかけた瞬間が確かにあった・・でも・・

無かった事にしてすぐ通り過ぎた目の前の快楽のために・・

この後・夕食の準備から本当に気まずくて情けなくて辛かった・・

それからまた
月日は流れて・・

気が付けば冬休みに
入っていた

夏休み以来、再び家で一人
家事をする日常をおくる

今日はりな姉ちゃんと
一緒に買い物に
行くはずだったが・・

彼女に急な仕事が入って
ダメになってしまった

ごめーん

この時期は
もー・・

しょうが
ないのよ

仕事で休日が潰れる事は
これまでもよくあった

前から疑問だった・・
何で彼女はそこまで
して働くんだろう・・

お金に困ってる
わけでもないのに
休日を潰してまで・・

お金とかは関係なく
とにかく仕事に行く
それが大人にとっては
当たり前なのか・・

今この時間も
大人は皆、社会に出て
働いてるんだよな・・

平日のこんな時間に
家でのんびりしてるのは

冬休み中の
子供ぐらいか・・

俺は冬休み中の子供で
彼女は社会人の大人で・・

俺が色々と情けないのも
仕方ないんじゃないか
実際まだ子供なんだから・・

正月はあっという間に
通り過ぎて冬休みも
あとわずかになった

午前11時過ぎ・・

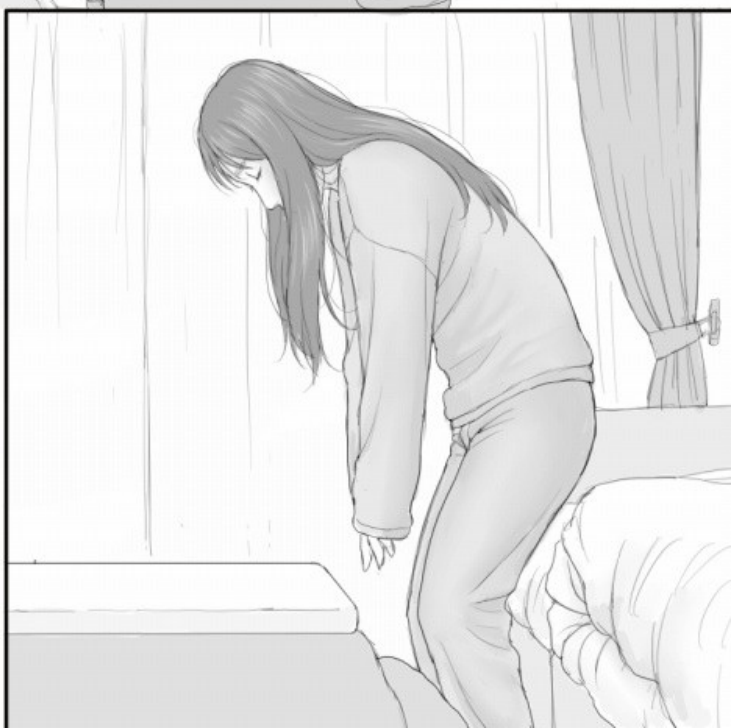
今頃りな姉ちゃんの
朝食の片づけをしている

できるだけ寝させて
あげようとした結果
起すのが遅くなってしまった

今日は彼女は遅番で
昼過ぎからの仕事になる

三が日は二人とも実家で
すごしたので休息は
とれたはずだけど

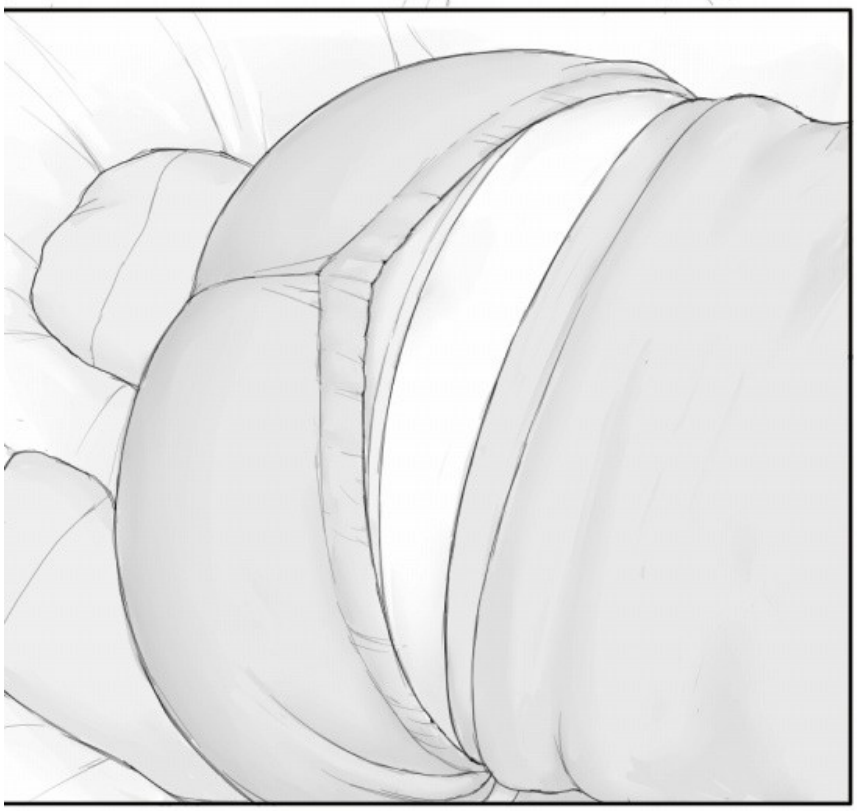
年末かなり忙しい感じ
だったからまだ疲れが
残ってるのかもしれない・・



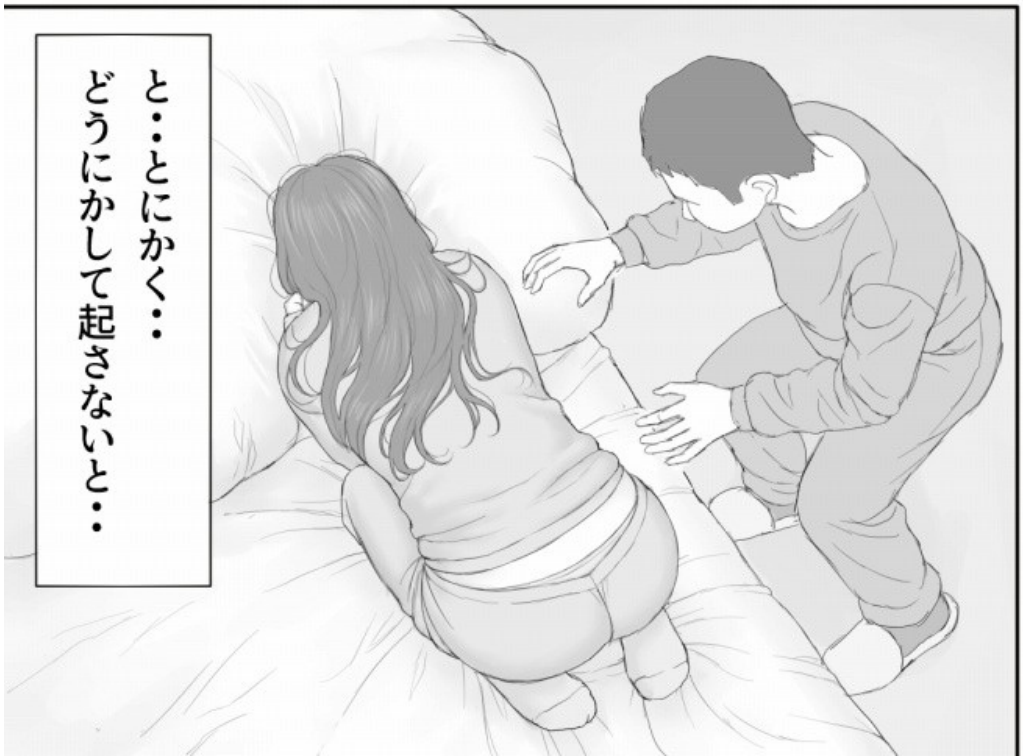
んっ
はぁ

あれ・・・
もしかして

いくら遅番といっても・・
今から二度寝はさすがにヤバいだろ
12時半には家を出ないといけないのに・・
これは・・やっぱり起すべきだよな・・
りな姉ちゃん
りな姉ちゃん今から寝たりしたら・・



ヤバい・・もう本格的に
眠りに入ってる・・


と・・とにかく・・
どうにかして起さないと・・

りな姉ちゃん

あぁ・・・

この感触・・

すごい柔らかい・・
服も体も・・

あーいい匂い
朝の寝巻の匂い・・

すごい・・
気持ちいい・・

あったかくて いい匂いで
気持ちよくて もう・・

ヤバい・・強烈な欲求が・・
今すぐ抱きつきたい・・

・・・・

いや・・だめだ・・
彼女は今疲れて
眠ってるんだ・・

これから仕事に行かなきゃ
いけないのにこんな事・・

やってはいけない・・
今はとにかく
やるべきじゃない・・

我慢・・しなければ・・
止めないと・・今は・・

我慢・・・・・・　我慢・・・
これは・・・　無理だ・・

だって・・しょうがないんだ・・
俺は子供だから・・
自分を制御できないんだ
これは・・仕方ないんだ・・

りな姉ちゃんの肌・・
この匂い・・この感触・・
本当に・・ 魅惑的すぎる・・
もっと・・もっと触りたい・・
服を脱がして裸にして・・
全身をもっと・・
フー
フー

白い肌・・キレイだ・・
ハァ
ハァ

朝の体・・こんな匂いなんだ・・
ハァ
ハァ
ハァ

ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ

ん
んー
ん
もー
やぁだ

ふっ
ふっ
ん
んっ
ピク
ピク
ハァ
ハァ
あっ
あん

ハー
ハー
ハァ
ハァ
これは・・もう・・
しょうがないんだ・・

ズッ ズッ
ハァ
ハァ
ハァ
無理なんだ・・
俺は・・子供だから・・
うっ
うん
ズッ ズッ
んっ
んっ
もう・・こうなったら・・
止まれないんだ・・
ごめん・・
りな姉ちゃん・・
ズッ
ズン
ズン
ハッ
ハッ
ハッ
んっ
んん

ハッ
ハッ
ズン
ズン
ズン
ズン
あぁ・・りな姉ちゃんの中・・
すごい・・気持ちいい・・
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
んっ
うんっ
んんっ
うん
んっ
ん
ズプ
ズプ
ズプ
ズプ
ズプ
ズプ
ズプ
ズプ

ズッ ズッ ズッ

ハッ ハッ

ズプ ズプ ズプ

あっ

はっ

んっ

んー

ビクーン

！

ビクッ
ビクッ
ビクッ
あっ
あっ あっ

ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ハッ
ハッ
あっ
あん

ズッズッ
ズッズッ
あっ
あん
ズン
ズン
ズン
ズン
あん
あぁん
あん
ああああ気持ちいい・・
止まらない・・腰が・・
もう・・最後まで・・
ズン
ズン
ズン
ズン
トッ
トッ
トッ
トッ
あっ
あぁ
あっ
だめだ！　早く・・
早く・・抜か・・
あぁっ

ハァ
ニチャ
ハァ
ニチャ
ニチャ

ビュル
ビュル

ハァ
ハァ
ハァ
ビュ
ビュ

ハァ
ハァ
ハァ

冬休みは
終った

本当は気づいていた・・

前のように我を
失ったりする事が
無くなった自分に・・

本当は止めようと思えば
止める事が出来た・・
でも・・
俺はそれをしなかった・・

ずっと自分に言い訳してた
「これはしょうがないんだ
俺はまだ子供だから」

欲望の為に自分から子供の
ふりをする様になったら
もう終わりだな・・

一月最後の日曜日

久しぶりに二人の
休日が重なったので
一緒に買い物に行く

ビュー

おー

もっと厚いの
着ればいいのに

いつもそれ
着てるけど

あー・・
というか・・

これよりいいの
持ってないんで・・

早く言えば
いいのに

買ってあげるのよ
あったかいの

あ・・でも下に
いっぱい着こめば
これでも
全然問題
無いんで・・
いやもっと暖かいの
あった方がいいでしょ
そうだ
コウちゃん
誕生日いつ？
こっち来てから
一年近くたつから
もう誕生日
過ぎたよね？
いやまだです
2月4日なんで
もうすぐ
だけど・・
えっ4日なの
私8日だよ
じゃあ
ちょうど
いいじゃん
誕生日
プレゼントで
買ってあげるよ
今からお店に
買いに行こう
えっ
今から・・
でも買い物の
荷物があるし・・
お店で着て帰れば
いいんだよ

また一つ・・
負い目が出来てしまった・・
俺は何も返す事が出来ずに・・
負い目ばかりが増えていく
負い目が増えるたびに俺は何も言えなくなって・・
彼女がどんどん遠くなってる気がする・・こんなに近くにいるのに・・
何ヵ月も同じ家で一緒に暮らしてきたのに少しも距離は縮まらなかった・・
未だに敬語を使うのかどうかもハッキリしないそんな関係のまま・・

2月8日

生まれて初めて女性に贈るプレゼントを買う

しかし・・肝心の渡す相手はいない

たぶん遅くなると思うから・・

もう待ってなくていいからね

はい・・はい了解です・・

彼女は友人達と普通に誕生日をすごしている

ごく当たり前の事なのに・・何だろう・・この感情は・・

こんな安物贈る事に
何の意味があるんだ・・

VALHALLA

いつも居る人が居ないと
こんなに夜が静かになるんだ・・

自分だけ取り残された
ような孤独感を感じる

静かだ・・・

大人になって一人暮らし
始めたら毎日こんな
感じになるのか・・

彼女も・・・俺がここに
来るまではこんな夜を
すごしてたのかな・・

機会を失って結局
数日後に変なタイミングで
渡す事になってしまった

あれから一週間以上が過ぎた・・

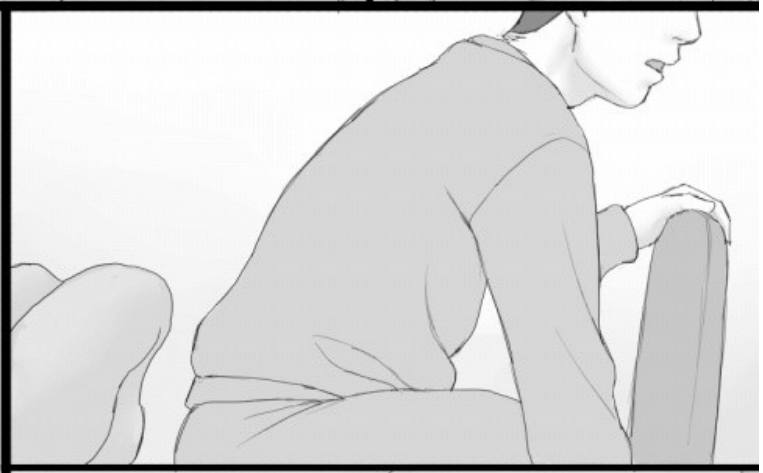
しかし未だに情けない思いを引きずっている・・

やっぱり慣れない事をやるもんじゃないな・・

何で俺は大人の女性に誕生日プレゼントなんて・・

それにしても・・・

風呂長すぎないか？



なんか前にも似たような事があったような・・

どうしたの？
大丈夫？
急に・・
立ちくらみが・・
完全にのぼせた・・
お風呂で寝ちゃった・・
りな姉ちゃん・・
やっぱり・・
すごい・・いい匂い・・

柔らかくて・・
本当に・・
初めて我慢できた・・
もっと早くできた
はずだった・・

3学期終了

春休みに入る

この同居生活も遂に
一年が経とうとしている

結局・・
俺にとってこの一年は
何だったんだろう・・

途中まではがんばって
どうにかやれてたと思う・・
過ちを犯すあの日までは・・

馬鹿な事を何度も繰り返して
勝手に一人で追い込まれて・・
結局理想とはかけ離れた
同居生活になってしまった・・

もしあの時・・
俺があんな事を
しなければ・・
欲望を抑える事が
出来てたら・・
どうなってたんだろう・・

彼女との関係は何か
変わってたんだろうか・・

もし・・
何か違ってたら・・

もし彼女が親戚じゃ
なかったら・・

もし俺が学生じゃ
なかったら・・

もし俺がお金を
いっぱい持ってて

もー
わざわざ
いーのに・・

ありがと

それで・・居候の
負い目がなかったら・・

もし俺が
子供じゃなかったら・・

どんな同居生活に
なってたんだろう・・

二年後 俺は学校を卒業して
ここを出ていく・・
何もうまくいかないまま・・

何も言う事が出来ずに
ただ通り過ぎる・・
子供にとってここは
そういう場所なんだろう

END